

■ バングラデシュにおける洪水とデング熱流行

洪水などの自然災害後にマラリアやデング熱、コレラなどの感染症が流行しやすいと言われているが、疫学的エビデンスがあるわけではない。我々は、首都ダッカ市内の11病院の入院患者データを収集し、ダッカ市内を流れる4河川の平均水位と週毎のデング熱患者数との関連を時系列解析を行って調べた。その結果、過去6週間の河川水位が3.9メートルを超えると、0.1メートルの河川水位上昇につきデング熱入院患者数が6.9パーセント増えることが明らかとなった。逆に、過去20週間の河川水位が3.9メートルを下回ると、0.1メートルの河川水位低下につきデング熱入院患者数が29.6パーセント増えることが分かった。この結

果はダッカ市内の降雨量を調整したうえでの値であり、降雨量よりも河川水位の方がデング熱患者数を予測するうえで有用であることが明らかとなった。因果関係については、詳細なベクター調査が必要と考えられた。

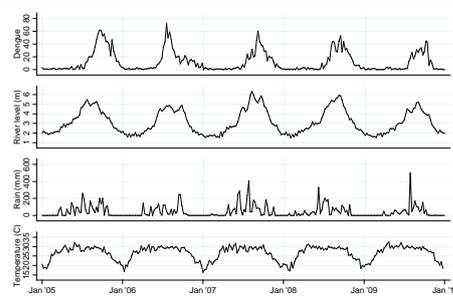


Figure 2

図3 ダッカ市内のデング熱患者数と気象因子の時系列データ（2005-2009年）